教職課程センター紀要　第3号　131-134ページ，2018年12月
Jour. Center Teacher Develop. Edu. Res., Daito Bunka Univ., No.3 131-134, 2018

研究ノート

学生が「一番勉強になった」と思った授業内容についてのまとめ

Summary about the Class Contents that Students Thought They Studied

小沢恵美子

Emiko OZAWA

Key words: 授業内容、教育心理学、学生（class contents, educational psychology, student ）

はじめに

授業を担当していて、授業内容（シラバス）はできるだけ学生の満足度が高くなるようにしたいと考える。そのためには、学生の興味関心の高いと思われる内容を組み込むことが必要である（例えば発達障がいやいじめなどの教育問題など）。しかし筆者が担当している「教育心理学概論 1」は、教育心理学の基礎的な知識を理解することも授業目的となる科目である。そのため教育心理学とタイトルのついたテキストでとり上げる内容も、授業内容に組み込む必要があると考える（例えば思考や学習、知能など）。このように考えた結果が授業内容（シラバス）であるが、学生自身はどのように感じているのだろうか、授業内容の中で必要性を感じられない内容などがあるのかを知りたいと思った。

そこで、学生自身に授業をふり返って「一番勉強になった授業」について記入してもらった内容から、今後のシラバスや授業展開に活用することとする。

方法

対象は筆者が担当している「教育心理学概論 1」である。試験日は前期が2017年7月21日の1、2、3限、後期が2018年1月19日2限であった。対象者は試験当日に出席した学生全員である。前期1限が69人、2限が63人、3限が56人、後期2限が70人、合計258人であった。

授業の最後に行なった試験問題の一部として、以下の設問に記入してもらうようにした。

＜設問＞今回の授業で、あなたが一番「勉強になった」内容は何ですか？具体的に書いてください。
＜解答内容＞授業の日付と、一番「勉強になった」授業内容。あわせて一番「勉強になった」と思う理由を記入してもらった。

集計結果

対象者となった258人全員が設問に解答してくれた。その結果をシラバスにそって集計した。シラバスは15回の授業計画であったが、休講などがあり、今年度は以下の授業を行った（表1参照）。

表1　2017年度に実施した授業内容

回	授業内容	前期授業	後期授業
1	ガイダンス、自己紹介	4/14	9/15
2	発達について：発達理論（発達に影響している要因、ピアジェ、エリクソン）	4/21	9/22
3	発達について：幼児期、児童期（自己中心性、保存の概念、勤勉性対劣等感）	4/28	9/29
4	発達について：青年期の特徴（アイデンティティ対アイデンティティ拡散、友人関係）	5/12	10/13
5	発達について：青年期の難しさ（アイデンティティ地位、摂食障害）	5/19	10/20

6	心の働きについて：記憶（記憶のメカニズム、記憶方略、忘れる）	5/26	10/27
7	心の働きについて：思考（メタ認知、問題解決）	6/2	11/10
8	心の働きについて：動機づけ（外発的動機づけ、内発的動機づけ、帰属理論）	6/9	11/17
9	心の働きについて：学習（古典的条件づけ、道具的条件づけ、観察学習）	6/16	11/24
10	心の働きについて：知能（知能の構造、知能検査、心理検査）	6/23	12/1
11	教育評価とその意味（相対評価、絶対評価）	6/30	12/8
12	発達上の問題について（学習障害、注意欠陥多動性障害、自閉症スペクトラム）	7/7	12/15
13	不適応への対応（不登校、いじめ）	7/14	12/19
14	理解度の確認テスト	7/21	1/19

前期、後期あわせた全体の集計は以下の通りであった（表2参照）。学生が「勉強になった」と思った授業で、割合が多かったもの上位3つは次のものであった。不適応への対応（13回目）、発達上の問題について（12回目）、教育評価とその意味（11回目）が多かった。

表2　全体の集計について

回	授業内容	人数（%）
1	ガイダンス、自己紹介	0（0%）
2	発達について：発達理論	11（4.2%）
3	発達について：幼児期、児童期	11（4.2%）
4	発達について：青年期の特徴	17（6,5%）
5	発達について：青年期の難しさ	19（7.3%）
6	心の働きについて：記憶	20（7.7%）
7	心の働きについて：思考	5（1.9%）
8	心の働きについて：動機づけ	25（9.6%）
9	心の働きについて：学習	14（5.4%）
10	心の働きについて：知能	7（2.7%）
11	教育評価とその意味	26（10.0%）
12	発達上の問題について	49（18.9%）
13	不適応への対応	54（20.9%）
14	理解度の確認テスト	0　(0%)

時限ごとの集計は以下の通りであった（表3参照）。表の一番左は授業回数を表している（授業内容は表1、2を参照）。

表3　時限ごとの人数とパーセントについて

	前期1限	前期2限	前期3限	後期2限
1	0（0%）	0（0%）	0（0%）	0（0%）
2	3（4.3%）	1（1.5%）	2（3.5%）	5（7.1%）
3	2（2.8%）	2（3.1%）	4（7.1%）	3（4.2%）
4	5（7.2%）	1（1.5%）	4（7.1%）	7（10.0%）
5	4（5.7%）	7（11.1%）	5（8.9%）	3（4.2%）
6	5（7.2%）	5（7.9%）	5（8.9%）	5（7.1%）
7	1（1.4%）	2（3.1%）	1（1.4%）	1（1.4%）
8	3（4.3%）	6（9.5%）	5（8.9%）	11（15.7%）
9	7（10.1%）	3（4.7%）	3（5.3%）	1（1.4%）
10	1（1.4%）	1（1.5%）	2（3.5%）	3（4.2%）
11	8（11.5%）	6（9.5%）	5（8.9%）	7（10.0%）
12	19（27.5%）	12（19.0%）	8（14.2%）	10（14.2%）
13	11（15.9%）	17（26.9%）	12（21.4%）	14（20.0%）
14	0（0%）	0（0%）	0（0%）	0（0%）

前期1限で学生が「勉強になった」と思った授業で、割合が多かったもの上位3つは次のものであった。発達上の問題について（12回目）、不適応への対応（13回目）、教育評価とその意味（11回目）が多かった。

前期2限で学生が「勉強になった」と思った授業で、割合が多かったもの上位3つは次のものであった。不適応への対応（13回目）、発達上の問題について（12回目）、発達について：青年期の難しさ（5回目）が多かった。

前期3限で学生が「勉強になった」と思った授業で、割合が多かったもの上位3つは次のものであった。不適応への対応（13回目）、発達上の問題について（12回目）、発達について：青年期の難しさ（5回目）、心の働き：記憶（6回目）、心の働き：学習（8回目）、教育評価とその意味（11回目）が多かった。

後期2限で学生が「勉強になった」と思った授業で、割合が多かったもの上位3つは次のものであった。不適応への対応（13回目）、心の働き：学習（8回目）、発達上の問題について（12回目）、が多かった。

まとめ

全体の集計結果より、不適応への対応（13回目）、発

達上の問題について（12回目）は、学生が「勉強になった」と思った授業内容であった。不登校、いじめの問題（13回目）や発達障がい（12回目）は教職の授業では重要なテーマであり、学生の興味関心が高い内容といえる。学生自身も、学生の立場ではなく自分が教員となった場合のことと結びつけたり、過去の自分の経験と重ねて考えていたりしていた。そのことは学生の理由の記述からも伺える。

＜13回目：理由＞いじめがとりあげられていて、自分の過去と照らし合わせることができたから（前期1限）。これから教師になるにあたって、一番ためになったと思ったから（前期2限）。教師になったら一度は経験があると思い、その子どもへの配慮をどのようにすればよいのかが勉強になった（前期3限）。先生になったら不登校という問題に出会ってしまうため、どういう心理で不登校になってしまうのか、一番考えたから（後期2限）。

＜12回目：理由＞発達障害の種類には様々な物があると知り、特徴や原因がわかったため、自分が教員という立場になった際、活かせると思ったから（前期1限）。「障がい」のある生徒と一言でいっても、その種類は様々で、1人1人のニーズに合った指導や関わり方を考えなければ行けないという事を学ぶことができたから（前期2限）。この授業を受けて、様々な障がいの特徴を学んだことで、自分なりの接し方を模索できたから（前期3限）。見た目で判断しにくい点で、教師がとるべき対応は何が大切なのだろうか？と考えることが多かった（後期2限）。

学生は中学校、もしくは高校の教員免許を希望しているので、発達について：発達理論（2回目）や発達について：幼児期、児童期（3回目）は誰も選ばない可能性もあると予想したが、結果は違った。少ないながらも「勉強になった」と思った学生がいた。理由については以下の通りである。

＜2 回目：理由＞新生児にも生まれながらに好みがあるなど、新しく知ったことが多かった（前期1限）。自分の性格は遺伝なのが環境なのか、ということを考えてしまっていたので、様々な考え方があるのだなあと、とても興味がもてたから（前期2限）。人の才能は遺伝なのか環境なのか、それとも両方がかけあわさってなど、自分自身はどれに影響されていたのかを考えることができたから（前期3限）。人間は自分が赤ちゃんの時のことは分からないので、見え方や認知方法などを知ることができたため（後期2限）。

＜3 回目：理由＞幼児期の自己中心性というものを初めて知ったから（前期1限）。大人が子どもたちの良いところをみつけてあげるという内容で、自分はまさにその通りだと強く思ったから（前期2限）。子供の教育はとても大事であるというとこが再認識できた授業だった（前期3限）。集団活動の体験、社会的スキルの獲得などの社会性の良い点、悪い点を再確認できた（後期2限）。

新しい知識に触れることは、学生にとって印象に残り、勉強になったと感じたことが伺えた。教える側にとって当たり前と思う内容も、学生にとっては初めて聞く内容のことが多いと思われる。この初めて聞く内容が「勉強となった」と思ってもらえるように、学生にとってのわかりやすさを意識した説明や授業展開を心がけたい。また幼児期、児童期は学生が目指している教員免許と直接関わりはないが、自分が幼児だった時や、塾などで接している児童と関連させている学生がいた。やはり自分にとって身近なことは理解しやすいようである。

全体の集計において「勉強になった」と思った学生が一番少なかったのは、心の働きについて：思考（7回目）であり、その次が心の働きについて：知能（10回目）であった。教育心理学のテキストにはとり上げられるテーマであるが、学生にとっては難しいと感じる領域のようである。だが、この回を「勉強になった」と思った学生もいる。以下がその理由である。

＜7 回目：理由＞人間は気づかないうちに自分のことをコントロールし、次はどうすればいいか、どのように進むべきかなど考えている行動は、あたりまえだけど、すごいことであるんだなと、とても共感がもてた（前期 2限）。近年ネットの普及により調べればすぐ答えが出ると言う状況になった。考えなくても答えがでる事は、時間を有効活用できるメリットもあるが、考えるという行動が少なくなるデメリットがある（後期2限）。

＜10回目：理由＞配布資料の「先延ばし度」をやってみて、平均よりも高かったことが印象に残っている。「自分自身について」向き合って考える機会は少ないので、とても良い時間だった（前期1限）。配布資料の「先延ばし度」をやって、こういう心理を勉強すると自分についてもっと知ることができるし、自分を変えていくことができるんだと思ったので、印象深い（前期3限）。

この授業の到達目標の1つに「自分の経験や行動と心理学の理論や知見を結びつけ、自分の行動を分析できる」がある。授業内容が自分のことを考える機会になったのであれば、嬉しいかぎりである。また 10 回目だけでなく、簡単な質問紙を授業の中で実施した。それらが単に

「やった」「面白かった」で留まらず、自分を見つめるきっかけになった学生もいる。今後そのような学生が多くなるように、授業内容と質問紙の内容との関係、さらに日常生活や今までの経験との結びつきを丁寧に伝えていきたいと思う。

おわりに

今回は全体集計について概観した。より多くの学生が選ぶ授業内容はあるが、誰も選ばないというものはなかった。どの授業内容も学生にとっては「勉強になる」ものであったと思われる。

今後は学生が記入した理由の分類などを通して、より詳細な「勉強になった」理由を考えていきたい。また授業を行なった時限によって選ぶ授業回数が異なっていた。これはこの年度だけのことなのか、それとも学科によって傾向があるのかも検討していきたい。